

五島定置地域プロジェクト(定置漁業)

(さんりょう八号 19トン、さんりょう二号 7.3トン、さんりょう五号 0.8トン)

もうかる漁業創設支援事業検証結果報告書(改革漁船型・既存船活用型)

事業実施者:五島漁業協同組合

実施期間:平成28年4月1日～平成31年3月31日(3年間)

1. 事業の概要

近年水揚げが減少し、さらに魚価の低迷、漁業経費の高止まり等から厳しい漁業経営を強いられている五島地域の定置漁業において、「改革型漁船の導入による新たな操業体制の構築と、生産性の向上に適した改革型漁網の導入」を計画し、大型定置2か統・小型定置1か統による周年操業の中で、経営の効率化とコスト削減、カンパチ稚魚等未利用魚の養殖種苗としての活用、スルメイカの咬みつきによる漁獲物の魚価低下の改善と付加価値向上、労働環境の改善および地域への貢献等に取り組み、厳しい漁業環境下でも安定した漁業経営が可能な体制を確立するとともに、若者の雇用創出等による離島漁業の活性化と収益性改善のための実証事業を実施した。

2. 実証項目

【生産に関する事項】

A 改革型漁船を導入し、新たな操業体制へ転換する

- ① ツインキャブスタン・大型クレーン・サイドウインチ・フィッシュポンプ等の高性能漁撈機器を備えた19トン型漁船を中核とした、3隻操業へ転換し、操業の効率化と生産性の向上を
- ② 5隻⇒3隻への操業体制、乗組員17名⇒16名(網起こし16名⇒13名)への人員合理化、操業時間350分⇒275分への短縮による省コスト化。

- ③ 省エネ型の船体及びエンジン、同軸プロペラ推進式による省コスト化。(燃油費28千円の削減)

3. 実証結果

- ① 計画通りの高性能漁撈機器を備えた改革型漁船(19トン)を導入し、同船を本船とした3隻操業体制(網起こしは本船1隻)を確立した。
- ② 乗組員は16名に削減できた。網起こし船を1隻にしたことで、3か年平均10.6名と計画の13名を2.4名下回る結果となった。
また、1回当たりの操業時間は、3年間平均で184分(対計画比0.67)と大幅に短縮され、効率化・省コスト化を図ることができた。(下表参照)
修繕費・管理費の削減については、1隻操業の効果もあって、計画1,100千円の約半分の平均540千円に抑えられた。

乗組員の削減と操業時間の短縮

項目	計画	1年目	2年目	3年目	平均	計画比
平均網起人員	13.0名	10.2名	10.5名	11.1名	10.6名	0.82
平均操業時間	275分	189分	170分	193分	184分	0.67

- ③ 燃油費の削減については、漁獲量の少ない時期に、シャーベット製氷や強制循環装置の使用抑制等の策を講じたが、1～3年目通してブリの記録的な豊漁に伴い、漁場からの活魚輸送回数が大幅に増加したことにより、燃油使用量・金額とも計画の120%超となり、削減することはできなかった。

修繕費・燃油費の削減

項目	計画	1年目	2年目	3年目	平均	計画比	
修繕費(千円)	1,100	405	480	734	540	0.49	
燃油	使用量(ℓ)	21,613	26,961	24,622	27,862	26,482	1.23
	金額(千円)	1,945	2,476	2,056	2,926	2,486	1.28
	単価(円/ℓ)	90.0	91.8	83.5	105.0	93.9	1.04

2. 実証項目

B 生産性の向上に適した改革型漁網の導入

- ① 主に、スルメイカと鮮魚類を選別する選別仕切網の導入
(A1・A2漁場)
- ② 選別イケス網の追加
(A1・A2漁場)
- ③ 箱網の目合い拡大 (30mm⇒60mm)
(A1・A2漁場)
- ④ 小型定置運動場に底建網を増設し、網成りの好転と、底物活魚類の漁獲効率向上を図る。(A2漁場)
- ⑤ 容積の大きい金庫網の設置 (1,728m³→2,940m³) (B漁場)

C 未利用魚のカンパチ幼魚を養殖種苗として出荷する

- ① 改革型漁船に大、小の活魚艙を備え、強制循環仕様とする。
- ② 大型クレーン、キャンバスの活用
- ③ (取組記号B)選別仕切網の活用
- ④ フィッシュポンプによるアイゴの除去
- ⑤ 地域小型定置網業者との入網情報の交換・出荷先選定の相互協力による出荷量の確保

3. 実証結果

- ①② A1漁場及びA2漁場に、選別仕切網と選別イケス網を導入して、混獲による漁獲物(特にスルメイカ)の品質低下を回避しようとしたが、実証期間の3年間を通してスルメイカが不漁だったため明確な実証はできなかった。しかし、スルメイカ以外の他魚種では、選別漁獲できたことで魚価単価のアップが図られた。
- ③ 箱網の目合いも60mmに拡大し、破網リスクを軽減できた。
- ④ A2漁場に底建網を増設したことで網成りが良くなり、かつ、カンパチ・ヒラマサ・メイチダイなどの漁獲も増加した。
- ⑤ B漁場の金庫網の容積を大きくしたが、スルメイカの入網が少なく、目的であった収益向上の取組は実証できなかった。

(A1漁場:大型定置網:6月～11月)

1年目～3年目を通じて、スルメイカの入網が極端に減少したため、スルメイカに係る選別等の取組実証はできなかったが、他の鮮魚類、ケンサキイカ、クロマグロ、本ガツオ等の選別漁獲によって、高品質化が図られ、魚価の向上と水揚高の増加につながった。

3年目は、ブリやマグロ類の水揚増加により、計画(量208トン・金額63百万円)を大きく上回る377トン・149百万円となった。

(A2漁場:小型定置網:12月～5月)

箱網の目合い拡大や底建網設置の効果で、メイチダイ等活魚類、ヒラマサ幼魚・カンパチ幼魚の養殖種苗としての出荷に加え、一般的に漁獲量が増加し、1年目～3年目を通じ、計画を大幅に上回る水揚実績となった。3年目は、計画(量45トン・金額12百万円)を大きく上回る82トン・31百万円となった。

(B漁場:大型定置網:周年)

他漁場同様、1年目～3年目を通してスルメイカの入網が極めて少なく、金庫網設置に係る取組実証はできなかったが、活魚類の品質向上に取組み、魚価の安定を図った。3年目もスルメイカの入網は少なかったものの、ブリの大漁、夏季のメイチダイ、カンパチ等の好漁により、計画(量160トン・金額78百万円)を大きく上回る291トン・136百万円となった。

- ①②③ 選別仕切り網・活魚艙・強制循環装置・大型クレーン・キャンバスタモ等の設備を駆使し、カンパチ等幼魚の活魚活け込みを行った。
- ④ 3年間を通してアイゴの入網が少なく、フィッシュポンプによる除去の実証はできなかった。
- ⑤ 地域内の定置業者と連携して活魚活け込みしたカンパチ等幼魚を、県内外の養殖業者へ種苗として出荷した。(1年目25千尾、2年目46千尾、3年目18千尾)

2. 実証項目

3. 実証結果

A2漁場・B漁場におけるカンパチ及びヒラマサ幼魚の養殖種苗としての出荷取組については、1年目は計画未達となったが、2年目は計画達成できた。

3年目はカンパチ幼魚に魚病が発生したものの、A1・A2両漁場のヒラマサ幼魚が計画を上回った。
また、地域全体としても年間3万尾程度の養殖種苗を出荷できた。

未利用魚の養殖種苗への活用実績

(単位：尾、千円)

区分		改革計画		1年目		2年目		3年目		3年間合計		3年間平均	
魚種別	漁場	尾数	金額	尾数	金額	尾数	金額	尾数	金額	尾数	金額	尾数	金額
カンパチ 幼魚	A 2	6,000	960	1,530	363	9,240	2,180	4,408	931	15,178	3,474	5,059	1,158
	B	7,000	1,120	7,100	1,150	5,180	1,229	2,516	503	14,796	2,882	4,932	961
	合計	13,000	2,080	8,630	1,513	14,420	3,409	6,924	1,434	29,974	6,356	9,991	2,119
	達成率	—	—	0.66	0.73	1.11	1.64	0.53	0.69	2.31	3.06	0.77	1.02
ヒラマサ 幼魚	A 1	0	0	0	0	0	0	890	534	890	534	297	178
	A 2	500	350	0	0	765	450	810	486	1,575	936	525	312
	B	0	0	700	302	945	557	50	30	1,695	889	565	296
	合計	500	350	700	302	1,710	1,007	1,750	1,050	4,160	2,359	1,387	786
	達成率	—	—	1.40	0.86	3.42	2.88	3.50	3.00	8.32	6.74	2.77	2.25
地域全体		—	—	45,715	—	25,000	—	18,425	—	89,140	—	29,713	—

D 魚種別の選別水揚げの取り組み

- ① フィッシュポンプの装備、(取組記号B)選別仕切網との併用により、スルメイカの選別・マグロ等を選別し高品質化を図る。
- ② シャーベット製氷機の装備による効果的冷却(船上選別台による簡易選別)により傷イカの減少を図る。
- ③ ケンサキイカを沖合、船上にて箱詰め作業に取り組む。

- ① 1～3年目を通してスルメイカの入網が少なく、仕切網・フィッシュポンプの活用による咬み付き回避の取組は実証できなかった。
- ② マグロ類、サワラ等については、船上選別、シャーベット氷冷却などにより高品質化が図られた。
- ③ ケンサキイカを漁獲・選別後、即船上で箱詰め作業を実施したことで鮮度保持が図られ、魚価向上につながった。

ケンサキイカ船上箱詰出荷実績

魚種別	区分	計画	1年目	2年目	3年目	合計	平均	計画比
A 1 漁場	金額(千円)	2,457	3,320	1,537	1,941	6,798	2,266	0.92
	単価(円/kg)	1,024	1,392	1,196	1,549	—	1,379	1.35
A 2 漁場	金額(千円)	840	836	479	579	1,894	631	0.75
	単価(円/kg)	950	955	913	1,065	—	978	1.03
B 漁場	金額(千円)	1,197	2,471	992	2,287	5,750	1,917	1.60
	単価(円/kg)	836	1,113	1,279	1,488	—	1,293	1.55
合計	箱数(箱)	180	240	237	256	733	244	1.36
	金額(千円)	4,494	6,627	3,008	4,807	14,442	4,814	1.07
	単価(円/kg)	937	1,153	1,129	1,367	—	1,217	1.30

2. 実証項目

- ④ 選別による活魚としての活け込の増加を図る。

3. 実証結果

- ④ 夏場のカンパチ・メイチダイ・インダイ等の活魚出荷が好調で、活魚全体で1～3年目を通して計画を大きく上回る実績となった。

漁場別活魚出荷実績

魚種別	区分	計画	1年目	2年目	3年目	合計	平均	計画比
A 1 漁場	水揚総額(千円)	62,600	56,740	80,669	148,894	286,303	95,434	1.52
	活魚水揚(千円)	14,140	12,164	21,145	52,552	85,861	28,620	2.02
	活魚比率	0.23	0.21	0.26	0.35	0.30	0.30	—
A 2 漁場	水揚総額(千円)	12,100	27,409	23,423	30,973	81,805	27,268	2.25
	活魚水揚(千円)	3,514	6,114	8,989	9,392	24,495	8,165	2.32
	活魚比率	0.29	0.22	0.38	0.30	0.30	0.30	—
B 漁場	水揚総額(千円)	78,300	68,814	77,142	135,779	281,735	93,912	1.20
	活魚水揚(千円)	29,145	40,228	55,465	82,345	178,038	59,346	2.04
	活魚比率	0.37	0.58	0.72	0.61	0.63	0.63	—
合計	水揚総額(千円)	153,000	152,963	181,234	315,646	649,843	216,614	1.42
	活魚水揚(千円)	46,799	58,506	85,599	144,289	288,394	96,131	2.05
	活魚比率	0.31	0.38	0.47	0.46	0.44	0.44	—

E 改革型漁船の活魚艙を強制循環とし、用途に合った大小の活魚艙仕様とする

- ① 【強制循環型活魚艙を設置・大型キャンバス・選別仕切り網】による活魚品質の向上⇒需要に合わせた出荷調整を図る。

- ② アオリイカや産卵後の痩せブリを、定置網で漁獲される雑魚を餌として4～7か月間蓄養し出荷する。
(魚類養殖区画免許:平成28年4月取得済)

・蓄養作業 2名 (定置網の余剰労力)

- ① 強制循環型活魚艙・大型キャンバス・選別仕切り網の活用により、活魚水揚実績は1年目から3年目まで右肩上がりが増加したが、2年目、3年目のヒラメ・タイ・ヒラマサについては、盛漁期のブリとの混獲によって品質低下もあり魚価が若干低迷した。
また、ブリ大漁の影響で鮮魚出荷が増え、3年目の活魚比率が低下したものの、3年間の活魚比率は0.44と計画0.31を大きく上回った。

- ② アオリイカの蓄養は豆イカの入網が少なく、1年目実績なし、2年目18kg、3年目120kgと計画を達成できなかった。しかし、水揚量は少なかったものの、単価は3,000円/kg以上となり取り組む価値は見出せた。
※ アオリイカ種苗の確保が課題である。

また、ブリ・ヒラマサの蓄養については、3年平均の水揚量は1,336kgと計画1,600kgを若干下回った(計画比0.84)ものの、水揚額については1,571千円と計画1,120千円(計画比1.40)を上回った。

アオリイカ及びブリ・ヒラマサの蓄養出荷実績

(単位: kg、千円)

区分	改革計画		1年目		2年目		3年目		3年間平均	
魚種別	水揚量	金額	水揚量	金額	水揚量	金額	水揚量	金額	水揚量	金額
アオリイカ	400	800	0	0	18	51	120	409	46	153
対比	—	—	0.00	0.00	0.05	0.06	0.30	0.51	0.12	0.19
ブリ	1,600	1,120	831	810	1,079	1,025	1,293	1,844	1,068	1,226
ヒラマサ	0	0	304	240	255	330	246	463	268	344
合計	1,600	1,120	1,135	1,050	1,334	1,355	1,539	2,307	1,336	1,571
対比	—	—	0.71	0.94	0.83	1.21	0.96	2.06	0.84	1.40

2. 実証項目

F 鮮度管理の徹底

- ① 改革型漁船の魚艙を断熱構造とする。
- ② 専用貯氷庫を設置する。
- ③ シャーベット製氷機を装備する。

G クロマグロ幼魚等の逃避率向上

- ① 選別生け簀網・選別仕切り網によるクロマグロ幼魚の再放流の取組み

3. 実証結果

- ①②③ 断熱構造の魚艙において、通常氷とシャーベット氷を併用した冷却を行い鮮度保持に努めた。特に、マグロ類・カジキ類・カツオ類等神経メの効果がある魚種では、シャーベット氷による鮮度保持が効果的であった。

- ① クロマグロ幼魚の再放流の取組みについて、計画では、魚取部に設置した逃避口から放流する予定だったが、1年目に網への衝突があり、タモ網による放流となった。2年目は魚体が大きく多量だったため、ダイバーを投入し、一旦箱網後部へ戻し、箱網を全開放して放流した。3年目も同様に箱網戻しと、箱網全開放、キャンバスタモによる放流に取組んだ。

クロマグロ幼魚再放流の取組実績

魚種	区分	1年目	2年目	3年目	合計
クロマグロ	取組日数(日)	7	44	26	77
	休漁日数(日)	1	9	1	11
	放流尾数(尾)	130	5,368	418	5,916
	総重量(kg)	750	48,156	4,154	53,060

- ② B漁場の底建網にウミガメ逃避穴を設置する。



- ② B漁場の底建網天井部分にウミガメ逃避穴を設置し、ウミガメの逃避を助けた。入網確認数が年々減少していることから、逃避穴設置による効果は出ているものと推測される。

ウミガメ入網・逃避の実績

魚種	区分	1年目	2年目	3年目	合計
ウミガメ (B漁場)	入網頭数(頭)	9	9	7	25
	生存頭数(頭)	1	1	1	3
※参考 (A漁場)	入網頭数(頭)	12	17	6	35
	生存頭数(頭)	12	17	6	35

H 高性能の漁撈機器を装備した改革型漁船の導入

- 1隻操業とし、下記の仕様の高能力化により安全性の向上を図る。
 - 1) フラットデッキ
 - 2) ツインキャブスタン
 - 3) 大型クレーン
 - 4) 5トンサイドウインチ
- ① 船上作業時間の短縮(現状の2～3割短縮)

- 大型(19トン)の改革型漁船及びツインキャブスタン、大型クレーン等高性能漁撈機器の導入により、安全性の確保と作業効率の向上を図ることができ、かつ、本船1隻での網起こし作業への転換を実現した。

- ① 船上作業時間の短縮は、操業時間が3年平均で1日当たり91分の短縮となり、網替え作業時間も同じく1回当たり30分～60分程度の短縮が図られた。

漁撈管理作業時間の実績と計画対比

項目	計画	1年目	2年目	3年目	平均
操業時間の実績(分)	275	171	189	193	184
短縮時間(分)	—	104	86	82	91
網替え作業時間の実績(分)	120～240	90～180	90～180	90～180	90～180
短縮時間(分)	—	30～60	30～60	30～60	30～60

2. 実証項目

- ② 安全性の向上により、B漁場網起こし作業機会の増加を図る。(224日⇒231日)

3. 実証結果

- ② 高性能漁撈機器の導入によって安全性は向上したが、スルメイカの入網が極端に少なかったこと等により作業機会は計画を下回った。逆に、異常潮流により作業できない日が増加した。
 ※ 2年目の作業回数が極端に少ないのは、資源管理休漁の実施と台風の来襲及び時化の影響によるものである。

B漁場の作業日数の計画と実績

項目	計画	1年目	2年目	3年目	平均
作業日数(日)	231	214	184	214	204
対比	—	0.93	0.80	0.93	0.88
作業回数(回)	231	225	189	225	213
対比	—	0.97	0.82	0.97	0.92

I 短期蓄養事業・付加価値作業の取り組みによる収益改善

- ① 全員の周年雇用
 ② 休日の増加(月2日⇒4日)

- ① 全乗組員の周年雇用を実現した。
 ② 休日の増加について、1年目(月平均4.8日)、2年目(月平均4.5日)、3年目(月平均5.2日)と、月平均4日間以上の休日を付与した。
 以上の取組により、雇用の安定化と乗組員の労働意欲の向上につながった。

J 市場価値の向上

- ① 改革型漁船、(取組E)・(取組F)による、鮮魚・活魚類品質向上
 ② 漁協加工場による付加価値化販売
 ③ 大型魚の活き〆・神経抜き(仮称：五島〆)の実践による差別化販売を図る。
 ④ 流通市場(福岡・長崎)との直接的な情報交換(相場・需要等)の強化

- ①③④ (取組E)・(取組F)により、マグロ類・カジキ類・カツオ類の鮮魚類を身質安定のために神経〆処理し、かつ、シャーベット氷による冷却出荷で鮮度保持を図り、高値安定に努めた。
 また、2年目・3年目のブリ盛漁期においては、活魚での出荷調整や神経〆による差別化に取り組むとともに、市場等との情報共有を図りながら、販売先の確保に取り組んだ。

- ② 2年目に漁獲された小シイラを漁協加工場においてすり身加工処理し、2.8トン141千円を販売した。

主要魚種の魚価推移実績と計画対比 (単位：円/kg)

魚種	計画	1年目	2年目	3年目	平均	計画比
カツオ	577	1,840	1,938	934	1,571	2.72
カジキ類	950	950	1,290	1,549	1,263	1.33
マグロ(大)	5,116	6,106	5,093	5,482	5,560	1.09

3年目3月のブリ出荷先・方法別実績

出荷先	処理方法	水揚量(kg)	水揚額(千円)	単価(円/kg)	量割合(%)
長崎魚市(活魚)	魚市神経〆	87,357	23,819	273	39
長崎魚市(箱)	氷〆	78,473	19,836	253	35
福岡魚市(箱)	脱血神経〆	27,906	8,650	310	12
長崎漁連(箱)	神経〆	31,421	10,881	346	14
総出荷		225,157	63,186	281	100

2. 実証項目

K 地元漁業者との連携

- ① 地域内小型定置網と連携したカンパチの養殖種苗の供給販売。
- ② 釣り漁業者へ釣り餌の必要量の供給を図る。

- ③ 地域貢献
漁業集落活魚センターの活用、道の駅、民泊、地域イベント、ふるさと便への供給を図る。

ブリ、メジナ他200kg→400kg供給

L 漁網仕立技術の向上

- ① 替え網は、技術の研鑽目的から自前仕立てとする。
- ② 漁撈技術の見える化
県定置協会の《定置網漁労技術を伝えるための資料集》作製に協力し、その活用による定置網技術継承に取り組む。

3. 実証結果

- ① カンパチ・ヒラマサの養殖種苗供給は、1年目～3年目通して漁協販売が中心となり管内定置の入網状況を取りまとめて出荷した。(⇒取組記号C⑤参照)
- ② 地元釣り漁業者への餌供給は、漁協販売及び定置乗組員責任者が連携して実施した。

釣り漁業者への餌供給実績 (単位：kg)

項目	計画	1年目	2年目	3年目	平均
供給回数(回)	—	89	164	143	132
イカ類・アジ・サバ・サンマ	計画値なし	0	7,889	4,851	4,247
ソーダカツオ	なし	16,218	25,164	33,532	24,971
合計	—	16,218	33,053	38,383	29,218

- ③ 道の駅や民泊業者等への食材供給及び地域内での各種行事に食材提供や地域民への直売を実施し、計画400kgを大きく上回って、平均2,539kgを供給することができた。

(毎年の行事) 4月 金比羅祭り
12月 三井楽産品祭り

地域への食材供給実績

項目	計画	1年目	2年目	3年目	平均
供給回数(回)	—	0	279	368	324
供給量(kg)	400	0	2,188	2,889	2,539
供給額(千円)	—	0	1,653	2,408	2,031
単価(円/kg)	—	0	755	834	794

※平均値は、1年目実績がないため、2年目と3年目の平均。

- ① 漁網仕立技術向上のため、A1・A2箱網を自前で製作し、かつ、漁労長等が県定置協会等の研修会に参加し研鑽に努めた。
- ② 県定置協作製の定置漁業技術伝承用DVD編集に協力し、県内関係者に配布中である。
また、乗組員が他地区の漁場等視察・研修を実施した。

島根県温泉津の定置漁場研修 ⇒ 11名
長崎県定置協会研修会出席 ⇒ 4名
五島定置協議会への参加 ⇒ 4名

4. 収支、経費、償却前利益及びその計画との差異・その理由

【収入】

当初計画していたスルメイカの漁獲は、3年間通してほとんどなかったものの、ブリ等の漁獲が増加し、各年の水揚げは、計画153,000千円に対し、1年目はほぼ同額の152,963千円、2年目は対計画比18%増の181,234千円、3年目は106%増の315,646千円と年ごとに増加し、3か年平均で216,614千円となった。

【経費】

各年の経費総額は、1年目は計画227,514千円に対し0.6%増の228,897千円、2年目は計画166,857千円に対し8%増の180,257千円、3年目は計画146,668千円に対し48%増の216,599千円となった。

経費増の主な要因は、水揚げに伴い燃油代・魚箱代・氷代・販売経費等が増加し、また、3年目は網補修等漁具メンテナンスも多かったことから漁具費が増加したものである。人件費についても水揚げ好調の中で、昇給や賞与支出等が発生したことによるものである。

【償却前利益】

償却前利益は、1年目は計画37,093千円に対し35,673千円(対計画比96%)、2年目は計画37,905千円に対し52,739千円(対計画比139%)、3年目は計画38,030千円に対し131,525千円(対計画比346%)となり、2年目・3年目において計画を大きく上回った。3年間の平均でも、73,312千円となった。

これは3年間連続してスルメイカの不漁に見舞われたものの、ブリやケンサキイカ・クロマグロ等他魚種の水揚げ高増加が大きな要因である。

5. 次世代船建造の見通し

計画：償却前利益 35百万円 × (改革5年間平均)	次世代船建造までの年数 25年	船価 > 798百万円 (うち漁網：598百万円)								
	↓									
		<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="padding-right: 10px;">操業船</td> <td>154百万円 × 25年 / 25年 = 154百万円</td> </tr> <tr> <td>作業船</td> <td>46百万円 × 25年 / 25年 = 46百万円</td> </tr> <tr> <td>漁網(3漁場)</td> <td>359百万円 × 25年 / 15年 = 598百万円</td> </tr> <tr> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="border-top: 1px solid black;">798百万円</td> </tr> </table>	操業船	154百万円 × 25年 / 25年 = 154百万円	作業船	46百万円 × 25年 / 25年 = 46百万円	漁網(3漁場)	359百万円 × 25年 / 15年 = 598百万円	合計	798百万円
操業船	154百万円 × 25年 / 25年 = 154百万円									
作業船	46百万円 × 25年 / 25年 = 46百万円									
漁網(3漁場)	359百万円 × 25年 / 15年 = 598百万円									
合計	798百万円									
実績：償却前利益 73百万円 × (改革3年間平均)	次世代船建造までの年数 25年	船価 > 798百万円 (うち漁網：598百万円)								

償却前利益の3か年平均は、計画35百万円の2倍強の73百万円となっており、当初計画よりも早期に次世代船建造が可能の見通しとなっている。

6. 特記事項

実証事業1年目では、当初主要魚種のひとつとしていたスルメイカの水揚げがほとんどなく、その結果、水揚げも当初計画にわずかに届かず、償却前利益も計画の96%にとどまった。しかし、2年目・3年目においては、スルメイカ不漁が依然とし続く中、インダイ・ブリ類・サワラ・マグロ類等の水揚げが好調で、特に事業期間終了間際のブリの大量入網によって、水揚げ高が計画を大きく上回ったことにより、償却前利益も対計画比2年目139%、3年目346%となった。

3年間の実証期間を通じてスルメイカの不漁が続いたため、当事業の目玉のひとつとしていた仕切網導入の効果やフィッシュポンプ導入の効果を実証することはできなかったが、入網したクロマグロ幼魚やウミガメの再放流については、当初計画通り実施することができ、資源管理・保護に資することができた。

事業実施者：五島漁業協同組合 (TEL:0959-74-5510)

(第84回中央協議会で確認された。)